

信仰をもつことの意義とは

奨励	鄭 躍軍 [てい・やくぐん]
奨励者紹介	同志社大学文化情報学部教授
研究テーマ	社会現象の計量研究

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

(ハブライ人への手紙 11章1節)

イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」

(マルコによる福音書 9章23節)

クリスマス待つ

蠟燭に2本、灯がつかしました。今週は、アドベントと言い、クリスマスを迎える準備の2週目に入りました。キリスト教の暦の考え方では、クリスマスを待ち望むという意味のアドベント、待降節のはじまりが、新年となります。キリスト教でなぜクリスマスを祝うのかと言うと、神が私たちの歴史にひとり子イエス・キリストをこの世界を救うために送ったからなのです。もう少し別の言い方をすれば、神が私たち人間の歴史に、私たちの世界に、私たちの社会に、この現実を救うために介入してきたということです。人間のさまざまな欲望が支配する世界ではなく、神が人間に何を期待しているかということに思いを広げ、考えるときです。神の意志を伝えるために、イエス・キリストは、誕生したのです。

おはようございます。文化情報学部の鄭躍軍です。私はクリスチャンですが、このような場でお話をするのは大変恐縮です。今日は、信仰をもつことの意義に対する考え方を中心に、皆さんと分かち合う時間をもちたいと思っております。

信仰が意味するもの

日本を含め、多くの国では個人の信仰の自由が法的に認められています。これは、人が特定の宗教を信仰しているかどうかということによって、差別を受けることのないことを保証し、人間としての基本的権利が尊重されることを意味します。

一般の意味でいう信仰とは、神や仏などを信ずることですが、キリスト教の信仰では、世界を創造し、それに意味を与えてくださる唯一の神を信ずることです。言い換えれば、父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊の三者が等質で三位一体であることを信ずることです。したがって、神を信ずるかどうかということは、クリスチャンにとって「生と死」の選択と同じ重みをもつものです。

新約聖書「ハブライ人への手紙」11章1節では「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」と記されています。さて、人は何を望んで日々を送っていくべきか、そして人はどのように望んでいることを信ずるようになるのでしょうか。

前者に対する答えは、性別、年齢、社会地位、人種などに関係なく、おそらく幸せを求め、平安な日々を過ごすことになるでしょう。しかし、幸せあるいは幸福とは何なのか、人によってその理解は異なると考えます。つまり、個人の幸せを最優先に追求したい人もいれば、幸せな家庭を築きたい人もいます。もちろん、社会のために奉仕することを自分の幸せとする人もいます。一口で言えば、幸せとは不満のないことですが、家庭については、ロシアの文豪トルストイは「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はそれぞれに不幸なものである」（アンナ・カレーニナより）という名言を言い残しました。つまり、幸せを感じることはすべての家庭に共通していますが、不幸については、様々な不満が含まれていきます。クリスチャンが一番望むことは神を喜ばせることです。

では、神を喜ばせることはどういうことでしょうか。使徒言行録の20章35節には、「受けるよりは与える方が幸いである」(It is more blessed to give than to receive)とあります。人から何かを受けるより、人に何かを与える方が幸せなことです。なお、ここでは物質的幸福をさすhappyではなく、精神的幸福、満足感を意味するblessedが使われています。これは神からの祝福です。

一方、後者「人はどのように望んでいることを信ずるか」に対して答えを出すのは簡単ではありません。日常生活の様々な場面では、人びとが関心ある事柄が事実であるかどうかを自分の目で確かめたいのです。言い換えれば、世の中には自ら確かめないものを事実と認めない人が大勢います。私自身もかつてそのような人の一人でした。

私がクリスチャンになる前のことです。何人かの牧師に「神の存在を私に見せていただけますか?」と何度も問いかけたことがあります。自分が納得した回答は得られませんでした。諦めようとしたところ、ある物理学に詳しい牧師は、私に「あなたは電気存在を認めますか?」と逆に質問してきました。「電灯の明かり、電子機械の動きを見れば、誰でも電気存在は認めますよ」と私は即答しました。そして牧師は「電気は元々自然界に存在するもので、照明や機械に使うことはなくても、それが存在するという事実は変わりませんよ」と返してきました。それを聞いたら、私は一瞬言葉を失ってしまいました。それまでの自分の目で確かめない限り物事を信じようとしないうという自分の考えを改めました。

もし、何でも自分の目で確かめてから信じるならば、人生にとっていろいろなチャンスを失うことになるのは間違いないでしょう。したがって、自分が望んでいることなら、それを信ずることは大切です。

さて、私が神を信ずるようになったきっかけを少しお話ししましょう。若い頃田舎の夜空をよく望みました。その時からずっと考えていたことが一つあります。広い宇宙には数多くの銀河や星雲があり、私たちが暮らしている地球は2000億個の星が集まって出来ている銀河系に属します。太陽と似た星も200億個あると言われていました。銀河系の中心から、かなり離れた所に太陽系と名付けられる場所があります。地球は太陽系の第3惑星です。地球は、自転しながら太陽のまわりを公転しています。また、月は地球のまわりを回っている唯一の惑星です。

皆さんは去る12月10日に起きた皆既月食をご覧になったのでしょうか。月全体が地球の影に隠れるという皆既月食現象は不思議でしょう。このような広大な宇宙には数えきれない数の恒星と衛星があるにもかかわらず、なぜ互いに衝突はなく、秩序をもつ完結した世界体系として存在しているのでしょうか。

宇宙の形成に関しては様々な学説がありますが、確定的なものはまだありません。次第に、私は人の力ではこのような完璧に近い宇宙を構築できず、我々の想像を遙かに超える力によるものと信ずるようになりました。それは神の力です。このように、我々は神の力を目で見ることができませんが、神の力は遍在していることを感じることが出来ます。新約聖書「マルコによる福音書」9章23節「イエスは言われた。『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」と記されています。また、英文版旧約聖書「創世記」1章1節では「In the beginning God created the heavens and the earth.」と記されています。ここで注目していただきたいのは、神が創られた天国は一方所ではなく、たくさんあることがお分かりでしょう。つまり、神の無限な力を自分の目で確かめることはできないが、大胆に確信をもって信ずるべきではないかと思えます。

なぜ人は信仰をもつ必要があるのか

人生にとって、本当に信仰が必要でしょうか?

人間は誰でも楽しいとき、嬉しいときもあれば、苦しいとき、悲しいときもあります。これこそ人生です。正しい信仰は神の教えであり、人びとに人生の勇気、希望、活力を与えるとともに、罪から人びとを救い、正しい道へ導く源なのです。信仰は、人の生死を説き明かし、人びとに生きるための指針を与えるから、これを常に信ずることは、自らの願いを成就し、より高い目標をめざし、より充実した人生に育む糧です。

さて、我々は順風満帆のときにどのような心構えをもつべきなのか。今日では、自らのために一生懸命頑張るが、周りのことに関心をもちたない人が増えています。自分は目標を達成した喜びが湧いているときこそ、謙虚な態度を必要とします。また苦しんでいる人や困っている人に手を差し伸べ、助けてあげることを幸せに感じるのではないかと考えます。世の中は、高い地位に就いている人も、お金をたくさんもっている人も、周りとの関わりなく、孤独に亡くなった例は少なくありません。したがって、順風満帆のときこそ、信仰を忘れずに素直に人に接することが人生にとって大切です。

また、若い頃は目の前の楽しみより将来の楽しみを目指して、少しでも自分のもてる能力や才能を伸ばそうと、懸命な努力を重ね、人や社会に何かを与えることを目指すのではなく、自分自身も。

一方、人が苦難に陥ったときにどのように乗り越えるべきでしょうか?

人生は誰でも苦しいときがあるでしょう。そのときこそ、信仰を忘れずに苦難を乗り越えることが大切です。人には時に信仰に対する誤解があります。それは、自分の願いを神にお祈りすれば必ず叶うという考えです。しかし、神の望んでいることと自分の願いとは必ずしも一致するとは限りません。自分の願いが叶わないときは、落ち込まず冷静になり、目標を真剣に見直し、再出発するのが正しい選択でしょう。

また、苦勞すること自身は、価値のある人生過程であることを忘れてはなりません。オーストリア出身のユダヤ人マルティン・ブーバー（1878—1965）は、「苦しみは人生の真理が姿を変えたものであり、神があなたと一緒にいるという合図である」と語りました。

蟻とキリギリスの寓話はよく知られていますが、苦勞を続けながらも真剣に生きている人たちの生き方が正しいでしょう。つまり、将来のことを考えずに苦勞しないと、いつか困難が訪れることはあるかもしれません。若いときこそ、人生を本当に楽しんで生きていくための力を、しっかりと蓄えるときであると言いたいです。

この節の最後に、努力のことについて少しお話しします。

言うまでもなく人生は努力が大切です。学習も仕事も同じです。何の努力もせずに、豊かな人生を得るはずはありません。しかしながら、自分の思いつきで努力しても、神が望んでいることでなければ祝福されません、苦しみに陥ったときにも加護されません。

自らの努力を価値あるものに実らせるためには、常に神の導きに従うことが大切です。それを重ねることにより、豊かな人生や幸せな家庭をもつことができるようになります。人がそれぞれの道を歩んでいますが、正しい信仰を糧として努力を重ねれば大きな実を結び、本当の幸せな人生を得ることができます。

社会における信仰の存在意義

これまで、個人にとって信仰のもつことの意義についてお話しをしましたが、最後に個人の信仰と社会との関連について少しお話しします。簡単に言えば、個人の信仰は神と人間との関係、社会における信仰は人間同士の関係を扱っています。後者は社会において他の人間とともに生きている個々人が神と人間との関係を社会的に活用することに当たります。言い換えれば、人間と人間の関係は、あくまでも神と人間との関係の次にくる問題です。

現代社会における信仰の必要性をめぐって、様々な議論がなされています。多くの科学的データに基づいた研究は、信仰と幸福度が正の関連があり、宗教信者数と薬物使用者数は負の関連があることを示しています。また、私どもの国際比較調査では、信仰をもつことが社会に対するポジティブな考え方と結び付いていることが明らかになりました。

今日の日本では、信仰をもつ人は極めて少ないことがよく知られています。私どもが実施した最新の統計調査によれば、2010年3月現在20歳以上の日本人の約3割強は何らかの信仰をもっていると答えましたが、そのほとんどは仏教ですが、キリスト教はわずか3%しかありません。なお、この割合は、日本人の国民性調査によれば、戦後60年間にわたって、ほとんど変わっていません。一方、宗教を信じるかどうかということと関係なく、日本人の3分の2以上は「宗教的な心は大切」と答えています。この結果について、日本人が柔軟的な宗教態度をもっているという解釈がありますが、私は日本人の信仰の曖昧さが映っているのではないかと思います。これにより、今日の日本社会において多くの人が生活、教育、政治などに明確な態度を示さないことが理解できるでしょう。これは決してよいこととは言えません。

一方、日本の隣国である中国について、全国データはありませんが、北京だけのデータを見れば、2011年10月現在成人の回答者のうち、何らかの信仰をもっていると答えた人は、わずか2割弱しかありません。信仰をもつ人口の割合は極めて少ないのです。これを見れば、中国において想像を遙かに超えた今日の官僚の汚職蔓延、道徳崩壊などの問題を理解できるのではないかと思います。

結論としては、多くの社会構成員が正しい信仰をもつことは、社会の安定と繁栄につながることで、また、多くの人の心が豊かになれば、人間同士の交わりが実現でき、信頼関係の向上に寄与できると考えます。これは現代社会における信仰の存在意義と言えます。

いずれにせよ、現代社会における信仰の役割は、人々がどのように信仰を選ぶべきかを教える点から始まっていると思います。特に日本や中国のように、信仰をもつ人が少ない社会では、正しい信仰とは何かを多くの人に知っていただくことが大切であると思います。

短い時間ですが、本日は信仰が意味するもの、そしてなぜ人は信仰をもつ必要があるのか、さらに社会における信仰の存在意義についてお話ししました。皆さんの生き方を考える際に少しでも参考になれば幸いです。

このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

2011年12月14日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録